

A 語句の意味と読み

(1) ほい／かねてからの本来の望み・本心。／×「ほんい」。教科書によっては「(女にとって) 望んだ相手ではないのに」と説明するものもあるので、お使いの教科書の説明に合わせること。

(2) 訪ねる・訪問する(ここは男が女のもとへ通うこと)。／×「弔う(死者をとむらう)」。古文の「とぶらふ」はまず「訪問する・見舞う」。

(3) むつき／陰暦一月。今の暦ではおよそ二月ごろ。／物語文では「むつき」と読むのがふつう。お使いの教科書のふりがなも確かめておくこと。本文に「梅の花ざかり」とあるのが手がかりで、今の暦の一月では梅は咲かない。

(4) (人目を避けて) 姿を隠す・よそへ移り住む。／「隠る」には「亡くなる」の意もあるが、あとに「あり所は聞けど」とあるので死んだのではない。

(5) こぞ／昨年・前の年。／和歌・物語では「こぞ」。本文に三度出てくる重要語。

(6) 終止形「ある(居る)」／座る。／直前の「立つ」と対になっているのが手がかり。

(7) 終止形「あばらなり」(ナリ活用形容動詞)／荒れはてて隙間が多い・がらんとしている。／女が去ったあとの邸の荒れようを表している。

B 文法(助動詞・助詞・係り結び)

(8) 打消の接続助詞。「～ないで・～なくて」の意。未然形(「あら」)に接続する。／未然形に付く「で」を見たら打消。訳に必ず「ない」を入れる。

(9) 完了の助動詞「ぬ」の連用形。直前の「隠れ」が下二段動詞「隠る」の連用形であり、下に過去の助動詞「けり」が続いているから。／「～にけり／～にき／～にたり」の「に」は完了。断定「なり」の「に」との区別が頻出。

(10) 已然形(「あらざりけれ」)に接続し、確定条件(原因・理由)で「～ので」の意を表す。／未然形+ば=仮定(もし～なら)／已然形+ば=確定(～ので)。

(11) 係助詞で、意味は強意(現代語訳には出さなくてよい)。係助詞「なむ」を受けて係り結びが成立し、結びが連体形になるため「けり」が「ける」となっている。／ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形。直前が「思ひつつ」なので、完了「ぬ」+推量「む」ではない。

(12) 完了(存続)の助動詞「り」の連体形。下に「歌」などの体言が省略されており、連体形で止めて「(去年を思い出し

て) 詠んだ歌」と名詞のようにまとめ、直後の和歌を導いている。／「り」はサ変未然形・四段已然形に接続(命令形接続とする教科書もある)。「詠め」は四段「詠む」の已然形。連体形止めの余情と説明する教科書もあるので、教科書の説明に合わせること。

(13) 打消の助動詞「ず」の連体形。理由①直前が未然形「あら」である(完了「ぬ」は連用形接続)。理由②係助詞「や」の結びとして連体形が要求される位置であり、完了「ぬ」の連体形なら「ぬる」となるはずだから。／⑭「春や昔の春ならぬ」の「ぬ」も同じ。「なら」は断定「なり」の未然形。

C 主語と敬意の方向

(14) 尊敬語(「おはします」は「あり・をり」の尊敬語で「いらっしゃる」)。作者から大后の宮への敬意。／地の文の敬語は作者からの敬意。会話文なら話し手からの敬意になる。

(15) 東の五条にあった大后の宮の西の対に住んでいた女。／直前の「住む人ありけり」を受けている。

(16) 男(本文の「心ざし深かりける人」)。／直前の「心ざし深かりける人」がそのまま主語になる。

(17) 西の対に住んでいた女。／直後に「あり所は聞けど」と探す側の話が続く。探しているのが男、姿を消したのが女。

(18) 男／「うち泣きて」「伏せりて」。／歌をよむ直前に何をしていたかを、「て」でつながる動作からさがす。間に主語が変わる合図(敬語や「を・に・ば」)が入っていないことも手がかり。

D 口語訳

(19) やはりつらいと思い続けていたのであった。／「つつ」は反復・継続で「～し続けて」。「なむ」は強意なので訳に出さなくてよい。

(20) (去年に) 似ているはずもない(似ることができそうもない)。／「べく」は「べし」の連用形。ここを当然(～はず)と説明する教科書と可能(～できる)と説明する教科書があるので、お使いの教科書の説明に合わせること。

(21) 月は(昔の)月ではないのか。春は昔の春ではないのか。／自分ひとりとはもとのままの身であるのに、女を失った今は、見慣れた月も春さえも昔とは別物のように感じられる、という嘆きの読み方。

(22) 月は(昔の)月ではないのか、いや、昔のままの月だ。春は昔の春ではないのか、いや、昔のままの春だ。／自然は何も変わらず、変わったのは自分の境遇だけだ、という読み方。どちらか一方が正解ではないので、両方の訳を書けるようにしておくこと。

E 内容・記述

(23) 去年の面影をさがしても見つからず、離れられないやせなさ。(二十九字) / 同じ動作のくり返しは、心の乱れや落ち着かなさを、説明ぬきで伝える書き方。

(24) (疑問説で読む場合) 月も春も去年とは別物に変わってしまった(=変わったもの)のに、女を思う自分の身ひとつはもとのまま(=変わらないもの)で、取り残されたような孤独と悲しみ。(七十六字) / (反語説で読む場合) 月も春も自分の身も昔のまま何ひとつ変わらない(=変わらないもの)のに、変わったのは女を失った境遇だけ(=変わったもの)だという悲しみ。(六十七字) / 「にして」は断定「なり」の連用形「に」+接続助詞「して」で「～であって・～であるのに」。「ひとつ」の一語に孤独が集まっている。疑問説なら月・春が「変わったもの」、反語説なら月・春は「変わらないもの」になるので、お使いの教科書の説明に合わせることに。

(25) (例) 翌年の正月、去年を恋しく思って女の住んでいた西の対を訪れ、立っては見、座っては見しても去年の面影はなく、荒れた板敷に月が傾くまで伏して思い出にひたり歌までよんだが、女がもういないという事実は何も変わらなかったから。(百七字) / 「何をしたか(訪ねた→見た→伏せた→よんだ)」→「それでも変わらなかったこと」の順に書くこととまとめる。

F 文学史・古典常識

(26) 歌物語／作者は未詳(はっきりわかっていない)。 / 和歌を中心に短い章段を連ねた物語。『大和物語』『平中物語』が同じジャンル。「作者＝在原業平」と決めつけないこと。

(27) 在原業平／『古今和歌集』(恋歌五)。 / 業平は六歌仙の一人。この段の女は、のちに二条の後となる藤原高子を思わせる人物として語られる。

(28) 寝殿造りで、中心の建物(寝殿)の西側に建てられた付属の建物(対の屋)。渡殿(渡り廊下)で寝殿とつながっている。 / 東の対・北の対もある。対の屋は女性の居所として使われることが多い。

【現代語訳(全文)】

昔、東の五条に、皇太后の宮がお住まいになっていた、その西の対に住む女がいた。その女を、本来の望みどおりの形ではないままに、深く思いをかけていた男が通っていたが、正月の十日ごろに、女はよそへ姿を隠してしまった。居場所は聞いたけれど、普通の人が行き通うことのできるような所でもなかったので、(男は)やはりつらいと思い続けていたのであった。

翌年の正月、梅の花の盛りのころに、(男は)去年を恋しく思って出かけて行って、立って見、座って見、(何度も)見るけれど、去年(の様子)に似ているはずもない。泣いて、荒れはてた板敷に、月が傾くまで横になって、去年を思い出して詠んだ(歌)。

月は(昔の)月ではないのか。春は昔の春ではないのか。私の身ひとつだけはもとのままの身であるのに。

と詠んで、夜がほのぼのと明けるころに、泣きながら帰ったのであった。

※歌は「や」を反語と取って、「月は昔のままの月ではないか(いや、昔のままの月だ)。春も昔のままの春ではないか(いや、昔のままの春だ)。それなのに、私の身ひとつだけがもとのままの身であって(=自分も自然も何ひとつ変わっていないのに、あの人だけがもういない)」と訳す説もある。この説は、=変わったのは自分を取りまく状況だけだ、という趣旨で読む立場である。どちらか一方だけが正解というわけではないので、お使いの教科書の訳に合わせることに。